

『ここで神を知ります。』 ヨブ記42:1-6

42:1 そこでヨブは主に答えて言った、

42:2 「わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを。

42:3 『無知をもって神の計りごとをおおうこの者はだれか』。それゆえ、わたしはみずから悟らない事を言い、みずから知らない、測り難い事を述べました。

42:4 『聞け、わたしは語ろう、わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ』。

42:5 わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします。

42:6 それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」。

●主題

神さまをどのように親しく知っているだろうか。

- I. 自分が一番、この世の宗教観
- II. 神さまが一番、聖書の宗教観
- III. 福音が大切、わたしたちの人生観

●序論

昔、開拓教会で子どもたちに勉強を教えていたころ、時、教会に来ていた中学生が、教会の正面に掲げていた聖書の御言葉を指さして、「こんなうそっぱちや!」と叫びました。

そこには「いつも喜びなさい」と書いてありました。

その中学生から「なにがうそっぱちなのか」、理由を聞いてみると、

「そうしようとしけれども、ちっともいいことあらへんもん」という返事。

お分かりいただけるでしょうか？

その子どもは、そうすれば見返りがある。そうすれば、なにかいいことがある…という、いわゆる”御利益”として理解していたのでしょね。

なるほど、その子どもたちが馴染んでいた、当たり前前の宗教観というものを、よく表現しているな…と思わされました。

●本論

I. 苦悩と戸惑いの経験の中で

ヨブのことを別名「苦難のしもべ」とも呼ぶことがあります。

この書の1章を見ると、彼はその人生で、神さまを敬い、誠実に生きることを大切にしました。神さまは、そんな彼を喜び、祝福を豊かに彼に与えていました。

それは、家族の笑顔と団らんがあり、そして財産も豊かに与えられた人生でした。

しかしある時、サタンが神さまにこのヨブのことでこう話を持ちかけています。

(新共同訳で)

1:9 サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。

1:10 あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。彼の

手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はその地に溢れるほどです。  
1:11 ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」

それらが、取り去られたら人は、神さまを呪うに違いない！と言っているのです。

失うと失望する。奪われると腹が立つ。また自分の願ったとおりでないというのだつ。

-実際、自分の思うとおりにならないと神さまに腹を立てて、「もう信じてやらない」などとという人もいるかも知れません。

-または神さまを責めることは怖いから…、と身近な人をスケープゴートにして、色々な理由をつけて怒りをぶつけると言う人もあるかも知れません。

-または、いわゆるまじめな人は、自分を責めて責めて、自分のどこかが悪いのだ…という苦しみをも一身に背負う方もいらっしゃいます。

そのどれもがサタンが、すでにこの世にもたらしている誤った宗教観です。つまり、自分が中心だから、自分からしか発想が生まれません。自分の感覚がたより、自分の見える世界がすべてです。

その結果、神さまを責めるか、人を責めるか、また自分自身を責めるようになります。しばしばこの罫は巧妙であることを…私たちは心して知っている必要があります。

## Ⅱ. ここで、神の語りかけを聞く

私をはじめこのヨブ記を読み終えた時の印象を今もはっきり覚えています。

それは「釈然としない。そして” わからない” 」というものでした。

その理由は、ヨブが受けた「苦痛の意味」を神さまは最期まで説明されなかった…とすることです。そのことが不可解でした。

私たちは、苦痛や問題、苦難の中から祈ります。

問題の解決を求め、「苦痛の意味と理由」を知りたいと訴えるでしょう。

ここでわたしたちと同様に意味と理由を求めたヨブは、神さまの語りかけを聞きます。

38:1 この時、主はつむじ風の中からヨブに答えられた、

38:2 「無知の言葉をもって、神の計りごとを暗くするこの者はだれか。

38:3 あなたは腰に帯して、男らしくせよ。わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。

38:4 わたしが地の基をすえた時、どこにいたか。もしあなたが知っているなら言え。

先週紹介した、阪神淡路大震災時に被災教会牧師の説教集のタイトルは、「地の基振るい動く時」というものでした。

その中で、「地の基が振るい動く」ことを経験した。しかしその先に、「地の基をすえた方」がいますことの信頼に生きること気づかされたことを語るのです。

ヨブは、神からの言葉を聞いたとき、その時はまだ苦難の中にありました。しかし、その自分に向けて語ってくださる神のみ声を聞いて、神は自分を捨てられたのではないことを知ることができました。

それは、まさに「地の基をすえられた方」が今自分に目を向けてくださっていることがはっきりと分かった瞬間でした。

この言葉に始まる神さまのお言葉は、何を示しているか。

それは、神さまが天地万物の造り主であり、その知識とご計画のの大きさ、その計りがたさは、私たち人間の想像を遙かに超えたものであるということです。

そして、わたしたちに「地の基をすえたわたしを思い見よ」と語るのです。

その言葉を聞いてヨブは答えます。別訳（新改訳）で見ましょう。

42:1 ヨブは主に答えて言った。

42:2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。…

42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。

ヨブは神さまの言葉を感動して受けとめ、そして喜び、安心を得ています。

改めてそれは、苦難が解決されたからでも理由が分かったからでもありません。

そうではなく、なによりもその神さまが、わたしを知っていてくださり、共にいてくださることがわかった。大切に關心を持っておられると知ったからに他なりません。

これがヨブにとってなによりもすばらしい感動であり、喜びとなったのです。

それはのちの使徒パウロの経験でもありました。

ローマ11:33-36

11:33 ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。

11:34 「だれが、主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。

11:35 また、だれが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか」。

11:36 万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アメン。

まさに「地の基をすえた方」に信頼を置く感動を経験する。それが、「人生のここで!」、つまりこの苦難の中であってなお、ヨブを、パウロを、そしてわたしたちの「ここで」安心を与える体験であることを覚えていただきたいのです。

### Ⅲ. ここで、神さまを知ることが祝福です

そこで神さまにこそ信頼を置く。それは、わかっているにもかかわらずできない、自分はそうしていると言いきれる自信は私たちには無いかも知れません。

ヨブは、苦難の中で「なぜ、こんな目に遭うのかわからない」という困惑を経験しました。

また友人たちに、何か罪や落ち度があるの殻ではないか…と責められる時、そこで、自分の正しさを主張していました。

そのたくさんさんの時間、たくさんさんのページを使って記されているやり取りのどれも、わたしたちに身近な葛藤ではないでしょうか。

そのどれも正しく聞こえる、けれども、そのどれによっても、本当の意味での解決も安心も得られない。

彼が安心できたのは、「地の基をすえられた神さま」の語り掛けを聞き、そのもとで自

分の弱さをすなおに認めることができた時であったのです。

そうして彼はこう語ります。

42:3 知識もなくて、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、(それはわたしです)。私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。…

42:6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

彼は、神の語りかけを聞き、自らの小ささ、愚かさを知り、そして神さまの前にこれまでの自分の正しさを主張して神さまの不当を責める、そんな不遜な言葉を悔い改めました。

ここから、神さまの御手による彼の回復の物語が始まります。

さいごに)

聖書は、信仰者の経験を代表してこういう言葉を記します。

詩篇113:71

苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました。

改めて、神さまはすべてをご存じです。主は良いお方です。

わたしたちを回復するのは、わたしたちの”中にある”信仰やそこにある正しさや力ではなく、外におられるまことの神さまを知ることです。

この方は、地の基をすえられたお方、真実なお方です。

42:5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。

この言葉を経験することのできる、幸いを自分の人生に迎えることができれば幸いに思います。